
NOVEL COLLECTERS

小金井 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NOVEL COLLECTERS

【Nコード】

N1089J

【作者名】

小金井 琥珀

【あらすじ】

この世界は、宝石、名刀、遺産、etc……。それらを総称して“ノベル”と呼ぶ。ノベルの中でも世界で四つしかないと言われている、“ピース”がある。ピースを全て集めると一つのノベルになり、願いを叶えてくれると言われているが、未だかつて誰一人として手に入れた者はいない。ピースを集めようとする者たちを、人々は“コレクター”と呼んだ。

主人公“レクト・コアヒール”は、かつてコレクターに家族を殺され、コレクターを憎んでいた。しかし、とある桜色の髪の少女に

出会って何もかもが変貌する――。

NOVEL 1：プロローグ（前書き）

初めまして、小金井琥珀です　これが僕の初めての投稿です。何かおかしいところがあれば指摘してもらえると嬉しいです^^
できれば末永くよろしくしていただけると幸いです^^
どうぞよろしくお願いします♪

NOVEL 1：プロローグ

辺り一面の家や木、花、川までもが真っ赤に燃え上がっている。人々の罵声と悲鳴が激しい炎の中へ消えていく。黒いローブを纏った者達が紅蓮の中を駆け抜け武器で扉をこじ開け、人を見ては剣で切り裂き、銃で打ち抜いていく。

「うっ」

体を震わせ怯えている少年がいた。

「“アレ”を探せええっ！」

「この村の何処かにあるはずだ！」

少年が身を縮め歯を鳴らしていた。

その少年の前に一人の男が現れた。その男が手を掲げると炎がともった。少年は怯えた目で男を見上げている。

「いい目をしているな。お前みたいな奴ほど俺たちにとっては邪魔だな」

その男の鋭い声が響く。

男が手のひらを突き出すと共に炎が放たれる。その刹那、少年は目をつぶった……。



「はっ！」

木の下で寝ていた少年が飛び起き辺りを見渡した。

「はぁ……はぁ……」

風の音、虫の鳴き声、木々が揺れている音しか聞こえてこない。右手で頭を押さえた。

「ゆ、夢か……」

赤色のタンクトップに紺色の長ズボンをはいている。黒色の癖のない短髪。垂れ目で瞳が黒色の少年は汗でびしょびしょだった。

「すげえベタだな。つか俺だよな！俺はベタベタか？」

少年はそんなことを言いつつ、溜息をついた。

「ふう……。まあ……。いつか」

急に気が抜けたような声になる。

「あつ！そーいえば今日店番頼まれてたんだっけ！やべっおっちゃん怒ってるかな」

急いで立ち上がり走って行く。店に着くとそーっと扉を開けた。

ゴツツ。頭に岩が落ちてきたような衝撃が走り、視線がいつのまにか下に向いていた。

「痛つてえ〜」

おもわず頭を両手で抱える。一人の大男が腕を組み少年の前に立っていた。

「ごらあ！“レク”今日は店番頼んでたろーが！何してやがった！」

大男がレクと呼ばれる少年を軽く片手で持ち上げ怒鳴りつけた。

「ゴメンゴメン。ちよつと外で転がってたら寝ちゃってさあ」

レクは苦笑しながら返答する。

「寝てただとお？ったく。まあいい。今度からはちゃんとしろよ」

レクを放し、さっさと店へ入っていった。後を追うようにレクも店の中に入っていく。店へ入ると見慣れない格好をした少女がカウンターの前に立っている後姿が目映った。

ロングで桜色の髪。白いローブを着ていて杖を持っている少女だ。こちらに気づいたのか、少女は振り向き、視線が繋がった。そのブラウンの瞳はとても深く澄んでいて体が硬直してしまった。

「こ、こんにちわ……」

強張ってしまった声であいさつをする。頬がゆっくり火照っているのを感じる。

「こんにちわ」

少女は微笑を浮かべ、レクの方へと向かってきた。少女はレクを通り過ぎて行き、店を出て行った。

「あ、ありがとうございます……」

レクは頭から煙をだして辺り一面を転げ回る。

「ほ……惚れた！」

「なんだって？」

いつの間にか大男が奥のほうのテーブルを拭いていた。

今更気づくが客が一人もない。が、そんなことはレクにはどうでも良かった。

「あの子に惚れたんだよー！」

「ハッハッハ！ 惚れただと？ 笑わせるじゃねーか」

大男は腹を抱えて大爆笑している。

「うつせーなほつとけ。またこないかなあ……」

仰向けになった状態で大男と話している。そのまま少女のことを考えていたらいつのまにか意識を失っていた。

鳥の鳴き声でゆっくりと目を開いた。

「ん、くあぁ。朝か……。あれ？ 俺いつ寝たんだ？ ……まっ
いつか」

レクは起き上がって洗面所へ行き、顔を洗った。洗い終わると力ウンターのある部屋へトボトボ歩きながら行く。

「おっちゃん。おはよー」

大男は店の準備をしている。

「おう。今日は早いな」

「まあね」

あくびをしながら頭をかく。

「おまえ昨日床で寝てたから俺が連れて行ってやったんだぞ。ったく連れて行くの大変だったんだからな」

大男は怒っているかのように強い口調だった。レクは両手を顔の前で合わせて頭を下げる。

「ゴメンゴメン、気をつけるよ。あつ、ちょっと出かけてくるわ」

レクはそう言うつと扉の方へ歩いて向かう。

「どこいくんだ？」

大男がレクに問いかける。

「いつものところ」

返事を返すと、店を出て行った。店を出ると高台のある方へ歩いて行く。村人のにぎやかな声が聞こえ、いろんな人達が目に映る。

「あつ、レクちゃんおはよう」

「おう、レク元気かい？」

村人達がレクに話しかける。レクは歯を覗かせ、村人たちに手を振ってゆつくりと歩いていく。高台へ着くと村で働いてる人、遊んでいる子供たち、村の様子が目に付く。

「今日も平和だねえ」

レクは微笑み、両手を広げて大きく深呼吸した。そのまま大の字に寝転び、空を見上げる。風の音、木々が揺れる音、虫の泣き声が子守唄のように聞こえてくる。

「あの子何してるかなあ……」

昨日の少女の顔が頭の中に浮かぶ。そのままゆつくりと目を閉じた。

何かが燃え上がる音と爆発音、人々の罵声と悲鳴が聞こえてきた。
「起きてください！」

聞き覚えのある声が頭の中に響く。その声でレクは目を覚ました。
「ん……だれ？」

目をこすりながら声の主の方へ向くと一人の少女がいた。

「き、君はあの時の！　なんでここに？　そーか分かったぞ、これはあれだな？　俺がまた会いたいと思った願いから生まれた幻覚だな？」

「違います、私は本物です！　そ、そーだそんなことより、大変なんです！　村が……」

少女は慌てている様子だった。

レクはよつんばいになり村を見下ろす。

「え？」

レクは硬直した。

さつきまでは平和でにぎやかだった村が今では真っ赤に燃え上がっているのがレクの目に焼きつく。

「なんだよこれ……。どーなってるんだよ！」

地面を強く叩きつけ歯を食いしばった。

「事情は後で説明します。それより早く村人たちを救わないと」

少女がそう言うのとレクは立ち上がり、少女と共に急いで村に戻る。村へ着くと黒いローブを纏った者達が村を襲っていた。家や木は焼かれ、村人たちは次々に倒れてゆく。

「“ノベル”を探せええ！」

黒いローブを纏った者達は、剣を振るい、引き金を引き、次々と村人を襲っていく。

「そーだ！　おっちゃんとは？　早く行かないと、おっちゃんが殺される！」

レクは急いで店へ戻り、扉を開く。すると、大男は血まみれになって倒れていた。急いで駆け寄り、大男を抱え込む。

「おっちゃん！　しっかりしろよ、おっちゃん！」

レクの瞳から滴が落ち始める。倒れている大男を力強く握り締めた。

黒いローブの者達“コレクター”達がレクのふるさを破壊していく記憶が頭の中をよぎる。

「くそつくそつくそつ！ あいつらあ……許さん、絶対に許さん！」
レクの周りから風が吹き、レクを中心に渦巻いていく。

「これってもしかして……」

少女が呟いた。

「うおおおおお！」

レクの回りを渦巻いている風が段々と強くなり店ごと吹き飛ばした。その風で少女も吹き飛ばされる。

「おっちゃん、待ってて」

そう呟くとレクは大男を安全な場所へ寝かせて黒いローブを纏った者達の方へ向かって行った。

「あつ！ ちよつとまつ……」

レクに少女の声は届かなかった。

「おい。ノベルは見つかったのか？」

「いえっ、まだ見つかっていません」

サングラスをかけていて、襲ってきた者のリーダーらしき人がいる。レクはそいつの方へ向かっていた。

「なんだ、てめえ。死にてーのか？」

一人の男がレクの前に立ちはだかり銃をこちらに向けてきた。

「邪魔だっ、どけ！」

「うわあああ！」

レクが男を怒鳴りつけると同時に、ものすごい突風が吹いた。すると男が悲鳴を上げながら吹き飛ばされていく。そのままサングラスの男の方へと向かい、足を止めた。サングラスの男はこちらに気づいたのかレクの方を向く。

「何だよその目は、気に入らねえな」

サングラスの男が拳を握り締めると拳が光りだした。地面を蹴ったかと思うといつの間にか目の前にいた。光っている拳でレクの頬を殴りつけると共に、拳が爆発する。

「ぐはっ！」

レクは後方に飛び、建物の中に突っ込んだ。

「どうだ？ 俺の魔法“爆裂拳”^{エクスフロード}の味は？」

サン格拉斯の男は微笑を浮かべている。

「お前はコレクターか？」

レクはサン格拉斯の男に鋭い声で問いかけ、立ち上がった。レクの頬は腫れていて血が流れている。だがレクは痛みより怒りの方が強く傷など痛くも痒くもなかった。

「それがどーした？」

サン格拉斯をいじり、また拳を作る。するとレクの方へゆっくりと向かってきた。レクの目の前で足を止める。

「俺はコレクターが大っ嫌いなんだよ。コレクターと聞くだけで腹が立つ！」

レクは歯を食いしばり体中に力を入れた。

「なんだと？ ますますム力つく野郎だな」

サン格拉斯の男はそう言うと、レクに殴りかかる。サン格拉斯の男の拳が爆発しレクは地面に叩き付けられた。サン格拉斯の男がレクを持ち上げ、腹部を殴る。少し浮いたレクを今度は蹴り飛ばす。

「ぐああああ！」

レクは建物に突っ込み、悲鳴を上げた。

サン格拉斯の男がいつの間にかレクの前に現れて、髪を掴み、レクの顔を持ち上げる。

「ノベルはどこだ？ 教えるんだったら生かしといてやるよ」

「て……めえに……教え……るもん……んか……ねえ！」

乾いた音が響くと共に腹に衝撃が入り、飛ばされる。レクは体中が傷だらけで吐血した。

「ぐほっ……くそお！」

拳を力強く握り締め、歯を食いしばる。サン格拉斯の男がゆっくりとこちらへ向かってき、胸倉を掴まれて持ち上げられる。

「とどめだっ！」

サングラスの男が拳を作ると今まで以上に拳が光り始めた。

レクの周りに風が渦巻き、段々強くなっていく。男は飛ばされて、地面に転がる。

「なんだっ、この風は！」

サングラスの男は驚いたような顔でレクを見ている。レクは必死に立ち上がる。

「くそおお、くそおおおおおおおおおおおお！」

レクの周りを渦巻いていた風がさらに重なり、男を巻き込み、意識を失った。

NOVEL 1：プロローグ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました
受験生なんていつ投稿できるかわかりませんが……できれば次回も
よろしくお願いします（＾０＾）

NOVEL 2：旅立ち（前書き）

ついに第二話投稿です♪

受験勉強が忙しくて小説書くのがとても大変ですね……。

まあ受験勉強なんかしてないんですが^^笑

そこは気にしないで行きましょう！

NOVEL 2：旅立ち

「うっ」

うねり声を上げながら重たい目蓋を持ち上げる。ポツポツと明かりが見える空がぼんやりと目に映る。

「はっ！ 村は、おっちゃんは？」

急に立ち上がり、辺りを見渡す。目に入っただのは村の壊れたあとと、いつものようににぎやかに騒ぎながら、村を修復している村人たちだった。

「あれ？ なんで皆元気なんだ？ そっか、あれは夢だったのか…

…いやでも村吹っ飛んでるし、夢じゃないか」

「あっ、起きました！」

「わっ！ び、びつくりした」

「す、すみません」

急に後ろから声をかけたのは綺麗なブラウンの瞳の少女だった。

「どこか痛いところありますか？」

「いや、特にはないけど……。つかなんで痛くないんだ？」

体中のあちこちを確認したが、怪我が全て治っている。

「えっとですね……。レクさんの怪我や村の人たちの怪我がないのは私の魔法“ノートマジック詩魔法”で、皆さんの怪我を治したからです」

「魔法？ そーいえばあのグラサンかけた奴も魔法とか言ってたっけ。ん？ なんで俺の名前知ってたんの？」

レクは頭の中が混乱し始める。頭を両手でかきながら、小さな脳で考えている。

「レクさんにも魔法の素質がありますよ。あと名前は私がレクさんのお店にいたときおじさんが言ってたので知ってます」

少女は両手を合わせてレクに笑いかけた。

「へ？ 何言ってるの、俺は魔法なんて使えないよ」

「今はですよ。使い方さえ分かれば魔法が使えるようになりますよ」

レクは何も分かってないような顔をし、腕を組んで首を傾げた。
「てか、魔法ってなに？」

「そ、そんなあ。魔法の存在を知らない人がいたなんて……」

少女はボソツと呟く。

「なんか言った？」

「いえ、なんでも」

少女は何かを考え出した。

「あのさあ、俺にも魔法が使えるって言ったけど、どうやって使うの？ できたら教えてほしんだけど」

少女の目が輝き始めた。

さつき何を考えていたのだろうか……。

まあ気にしないでおこう。

「はい、いいですよ！ その代わりなんですけど、条件があります」
「条件って？」

すごく嬉しそうな顔でレクを見ている。

なんだろうかこの視線は。

「ええつとですね、私の仲間になってください」

「よ、よろこんで！」

「ええー！ そこは悩むところでしょう？ そんなあっさり決めちゃっていいんですか？」

レクは頭をかいて、少し考えた。

「だってもう村ないし」

「だから皆さんがんばってるじゃないですか！」

「あつ、そっか」

レクは手をポンッと叩く。

「まったく、あなたって人は……」

「てかあんた仲間になってほしいのかほしくないのか全然分からないのだから？」

少女は顔を真っ赤に染める。
間。

「おお、レク起きたのか」

後ろから声をかけられ、レクは振り返る。そこには大男が腕を組んで立っていた。

「おっちゃん！ 大丈夫？」

「おうよ！ その嬢ちゃんが助けてくれねえと村人全員あの世へ行つてたがな。ハッハッハ！」

「そこ笑っちゃいけねーだろ！ ほんとにあの世行つてたらどーするんだよ！」

レクは、大男をビシビシ叩く。

「まあ気にすんな。それよりお前も嬢ちゃんが助けてねえとあの世行つてたんだぞ。さつさと礼言いやがれ！」

大男がレクの頭を殴る。

「いつてえ……。あつ、そーだった！ ええつと、ありがとう」

少女から目を逸らし、ちよつと赤くつている頬を人差し指でかく。

「馬鹿野郎！ ちゃんと礼言いやがれ、つたく……嬢ちゃんほんとありがとな」

大男がレクの頭を無理矢理下げさせ、自分も頭を下げた。

「い、いえ。いいですよ。それよりおじさん、レクさんを連れて行つたらダメでしょうか？」

「うゝん、別にいんじゃないの？ まあいなくなつても何も変わらんからなあ」

「そーですか、ならありがたくいただきますね」

おう！ と、大男が言い、少女は嬉しそうに笑う。

「ええ！ その勝手に決めちゃう？ 俺の意見はどうなの？ てか、少しは寂しがれよ！」

「そんなもん知るかつ！ 恩人が頼んでんだ、言う事聞いてさつさに行きやがれ！」

レクと大男が言い争う。両方が疲れ果て、言い争いが終わると少女が口を挟んだ。

「で、どっちにするんですか？」

「ちょ……ちょっと考えさせてくれ」

「だから行けつつつてんだろーが！」

「うるせえ、そんなもん俺が決めることだろーが！」

レクはそう言つと大男と少女に背を向け、ゆらゆらと高台の方へ歩きます。

「ったく……。素直じゃねえな」

「えっ？ どーゆーことですか？」

「あいつ、ほんとに行きたいんだよ。俺があいつ拾ってきてから十年ぐらい経つけど、いっつも高台に行つて村の外眺めてんだよな。それに嬢ちゃんだったらレクのタイプ、ストライクだし余計行きたいんだと思うぜ」

大男が親指を立てる。少女は頬を赤らめて、顔を隠すかのように下を向く。

「そ、そんなことないですよ！ それよりレクさんってこの村の人じゃなかったんですね……」

「あいつ今高台にいると思うから、行つてあいつを連れ出してやつてくれ」

「いいんですね？ それでは遠慮なく、レクさんを連れて行きますね」

少女は走つて高台に向かつて行く。少女は急に立ち止まる。

「あれ？ レクさん、何してるんですか？ もしかして……聞いてました」

「うん。ありがとう、俺決めたよ……一緒に連れて行つてくれ」

レクは地面に座り、顔を伏せて泣き出した。

「わかりました。それじゃあ明日の早朝、村から少し離れた大きな木の下で待ってます。あつ！ とても大きいのですぐ分かりますから安心してください。では、準備できたら来てくださいね」

レクは頷くと空を見上げる。夜空は、綺麗に星が浮いていた。

「よしっ！ 行くか」

綺麗な青い空が広がる中、短髪で黒髪の少年がリュックサックを肩に掛け、顔をパシパシと叩き、町の外へと向かう。

人に見つからないよう、崩れている建物の影に身を潜めながら進む。大きな木の下で立ち止まり木の陰から辺りを見渡す。

「誰もいねーよな……皆にばれたらやばいからな。よし、誰もいないな」

「おい、レク。どこ行くんだ？」

「うぎゃあー！」

レクは驚き、二メートルぐらい前に跳んだ。

「驚きすぎだろ今の！ もっと普通に驚けねーのか！」

振り返るとレクの方に右手の人差し指を向け、左手には細長い袋を持った大男が立っている。

「お、おっちゃん！ なんで分かったの？ つかそんなにでかいのになんでそんなに背後とるの上手いんだよ！」

「それはお前が見えたからに決まってるじゃないか。お前馬鹿か？ 背後をとれるのは昔俺が忍者だったからだ」

「まじで？ すげーな！」

レクは目を輝かせる。

「嘘」

「嘘かよ！」

今更気づくが、大声を出していたせいか村の人々に気づかれていた。

くそお……ばれたじゃねえか。

「で、そんな荷物持ってどこ行くんだ？」

「う……それは……」

「分かったぞ、登山でもするのか？」

「ちげえーよ！ いつから俺は登山家になったんだよ！」

「なんだ、違うのか」

レクは地面に手をつけ、下を向き、大男を見上げ、急に真剣な顔になる。

「……行くんだよ」

「だからどこに？」

「あの子と一緒に行くんだよ！」

大男は微笑し、レクの目の前まで来た。

「そうか……。実は知ってたんだ、わざと登山とか色々言ってたけど気にすんなよ？」

「知ってたのかよ！ ふざけんな、俺で遊んでそんなに楽しいかよ！」

「ハッハッハ！ 楽しいに決まってるじゃないか」

レクの頬が赤くなり始める。その後、また下を向く。

「知ってたんなら黙って行かせてくれよ……」

「悪かったな……。でも、お前に渡さないといけない物があるんだ」
「へ？」

大男は左手で持っていた袋から一本の刀を取り出しレクの方に差し出す。

「なんだこれ？」

ふうらいかく

「こいつは名刀“風来客”っていうノベルだ。この前来たコレクターはこいつを狙ってたんだろうな。まあそんなことはいい……。こいつを渡そうと思ってな。この刀はな、普通に使えばただの刀だが、使うものによつては風を呼ぶ事の出来る刀だ。持って行け」

レクは驚いたような顔で大男を見ていた。大男が話し終わると、レクは風来客を手に取り、強く抱きしめる。レクの瞳から滴が大量に落ち始める。

「あ……。ありがとう。大切にする」

「おう！ 折ったら許さねーからな」

大男はレクを抱きしめ、レクの前で初めて涙を見せた。自分の腕

で涙を拭い、レクを立たせ、背中を叩く。

「さあ、さつさとして来て！ 嬢ちゃんが待ってるぞ」

「うん。行ってくる」

レクも腕で涙を拭い、大男に笑顔を見せる。その後大男に背を向けて走りだした。街の出口で立ち止まると大男の方に振り返り、両手を上げて大きく振る。

「おっちゃん！ 元気でなあ、絶対に生きて帰ってくるからああ！」

「あつたりめーだ！ 死ぬんじゃないぞ、いつか村に帰って来いよおお！」

レクは村に背を向け一度も振り返らず去って行った。

延々と続く山道の中、短髪で黒髪の少年が息を切らしながら歩いていた。

「ぜえ……ぜえ……どこまで続くんだよ」

腕で額の汗をふきながらゆらゆらと歩く。

「くっそ……大きい木は分かるんだけどなあ。なんで山の頂上にあるんだよおお！」

少年は空に向かって叫んだ。登っても登っても景色の変わらない山道を歩いていくとやっと頂上が見え始めた。すると少年は目を輝かせ、猛ダッシュで走っていく。

「やったあ！ やつと着いたあ……。つかあの子どこだ？」

「レクさん遅いですよ！」

「ぎゃああつ！」

レクは十メートルほど山から転がり落ちる。

「なんでそんなに驚くんですか！ 私は幽霊じゃないですよ！」

レクはゆっくりと身を起こす。すると一人の少女がいた。

「いってえ……ごめんごめん。つかなんで皆俺の背後とるのそんなに上手いの？」

「まあいいですけど。あと、背後をとるのが上手いのは私が昔忍者だったからです」

「えっ、まじで？　すごくね？」

「嘘です」

「またかよ！」

レクの声は山の中で響いた。レクは立ち上がり、少女の前までゆらゆらと歩いて行く。

「なんでこんなに遅かったんですか？」

「それはおっちゃんと話しててちよつと遅くなっちゃって。つかこんな山の頂上だなんて聞いてないからだよ！　そこはちゃんと教えようよ！」

「そーですか。まあ気にしないでください」

「ええ？　そこは気にしようよ！」

「しつこいですよ」

「あんたのせいだろ！」

レクは叫びすぎたのと山道を歩いて来て体力が限界にきて、その場に座り込んだ。

「もうだめ……歩けない」

「じゃあ少し休んでから行きますか」

少女は微笑み、レクの隣に座る。

「そーいえば私名前教えましたっけ？」

「ああ……教えてもらってないなあ。じゃあ改めて自己紹介しよう」
レクは歯を見せ笑い、少女の方を向く。

「ええっと……俺は“レクト・コーアヒール”だ。これからよろしく！」

手を少女の方へ出し、握手を求める。少女もゆっくりと手をレクの方へ出し、二人の手がそつと重なる。

「私の名前を言うのは初めてですね。ポエトリ・ランゲージ」

「ポエムか……いい名前だね」

「そ、そんなことないですよ」

ポエムは顔を赤らめて頬に手を当てる。

「それより、ポエムは何で旅してるの？」

「そうですね……ノベルを探してるんですよ。だからレクさんも今日からコレクターですね」

「えっ？ まじで……？」

「まじです」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんとは」

「うわああー！」

レクは頭を両手で抑え、天に向かって叫んだ。

NOVEL 2：旅立ち（後書き）

ここまで読んでいただき感謝感激です！！！！

次の話からレクの魔法練習が始まります♪

まだ下手くそで面白くありませんがこれからもよろしくお願いします<>

でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1089j/>

NOVEL COLLECTERS

2010年10月28日03時52分発行